

2018年 南相馬市 被災地から新たな出発

第2編 震災後の『人々の暮らし』

NPO 法人福島環境カウンセラー協会 長 澤 利 枝

自然豊かな南相馬市は、農業、漁業、林業、酪農が盛んだった。街中の商店が生業を支えた。バブル期の企業進出で、一時は人口約 72,000 人の住民が住む、相双地方の中心地だった。

2011年3月11日14時46分『東日本大震災』により、すべてを失った・・・

1. 仲間たちと次世代へ繋ぐ農業の再生に向かって

◆ 南相馬市原町区雫地区『農事組合法人 ふぁーむ・しどけ』



代表理事 阿部喜良さん(70才)



ハウス内のキュウリ枯死



農事組合法人
ふぁーむ・しどけ
仲間達で考えたネーミング



朝8時 組合員の打ち合わせ会



作業所内の最新農機具



5月の田植え 機械で直播



7月下旬 穂が出始めた

阿部喜良さん 6代目専業農家

★水田 2.5ha、ハウスキュウリ 750坪栽培。震災による停電・重油不足によりキュウリ枯死。水田は津波から免れた。

★各地区の水田は潰滅し、農業放棄状態に陥った。平成23年10月5日原町区5地区で「東地区基盤整備組合」を結成。基盤整備が完了する田圃を、順次耕作開始すべく、農業再起を総意で決めた。整備完了までは、まだまだ先である。

★平成27年1月雫地区10人で

「農事組合法人 ふぁーむ・しどけ」

を設立。5月17haの水稲作付に着手。

★平成30年度 飼料米水稲 68haを作付。天のつぶ、ふくひびき半々。

★最終目標 4年後水田 100ha、畑 10ha 畑は、業務用芝生栽培。

★高齢者の組合員が多い現在、定年退職者を担い手に後継者育成をし、子、孫の代まで続く農業を目指す。

★農業継承の基盤づくりを最優先しながら、試行錯誤からの脱却を図る。

★機械、作業所等の貸与年数7年の間に収益を上げる経営を展開。

★耕作放棄農地の解消を目指す。

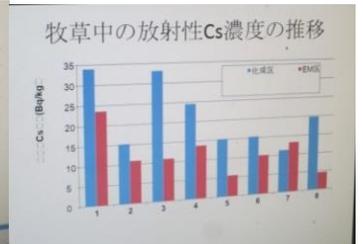
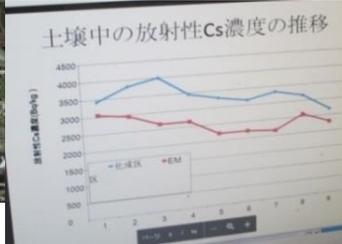
2. 酪農を守り、さらなる挑戦 祖父から父そして息子へと受け継ぐ

◆ 酪農家 瀧澤徳雄さん 瀧澤昇司さん



父 瀧澤徳雄さん(78才) 息子 瀧澤昇司さん(51才)

瀧澤氏 自ら土壌や牧草の放射能計測を行う
搾乳量などデータチェック のすべてを
パソコン管理



40頭のホルスタイン



搾乳量のチェック



搾乳量計測器



牛舎脇「営農パネル」
下には飼料保存



自宅前「営農パネル」
新たな取り組み あんぽ柿植栽



パネルの出力データ

馬場地区の瀧澤徳雄さんは祖父の代まで、米・麦・大豆・葉タバコ・養蚕をしていたが、昭和28年・29年の凶作に徳雄氏の父は、他の農家同様農作に加え現金収入のため2頭の乳牛を購入。徳雄氏は昭和45年(30才)で家督を継ぎ、水田等の耕作と酪農を拡大した。以来父子で取り込んできた。平成5年、息子の昇司さんに引き継ぎ「酪農家」として順調に乳牛を増やし、酪農経営を軌道に乗せてきた。震災前乳牛36頭、搾乳量は、1日700kg～800kg。経営は安泰であった。

2011年3月11日の原発事故で暗転

福島産の原乳から放射性ヨウ素が検出され、原乳の出荷制限指示。3か月後原乳の出荷が許可されたが、その間搾乳した原乳はすべて廃棄し、大切な乳牛も犠牲になった。“酪農をやり抜く・決してあきらめない”という強い意志のもと、田畑の除染も自分の納得する方法でやり抜き、平成27年ようやく自家飼料を与えられるまでになった。「跡を継ぐ」と言った息子(大学4年21才)の存在は、法人化の原動力になっている。

自然エネルギーと共生の農業を目指して

「ソーラーシェアリング」を導入。国の営農パネル設置条件は、農作物の収穫量80%以上の決まりである。現在15基稼働。出力750キロワット。高さ3.5m・間口6～6.5mである。牧草・水稻耕作などの作業をパネル下で、機械稼働が可能な設計にした。「資源循環型農業」の確立である。

3. 鹿島区真野川漁港の復興 今 漁港は若者が担う！

◆ 松野豊喜(とよき)さん 相馬双葉漁業組合鹿島地区代表



松野豊喜さん(76才)

津波で潰滅した漁港の復旧に尽力した松野さん。

漁船 45 隻中の内、残ったのは 4 隻のみ。ご本人も津波で船ごと国道 6 号線まで 2.8km も流され、一命を取り留めた。



シラス試験操業



シラス水揚げ



ホークリフトで運ぶ



漁獲高計量



第 3 回鹿島港祭



漁船は大漁旗で祭を盛り上げる



名物ホッキ飯を振る舞う

東日本大震災の津波で各漁港は潰滅。真野川漁港もすべてが失われた。農林水産省は、被災 3 県の漁港復旧を 1/3 減の措置にした。当時、真野川漁港は、合併により南相馬市に帰属しながら、旧鹿島町の所属のままだったため、嘆願書・請願書の提出は出来なかった。その後、行政機構改革によって南相馬市に帰属し、1 年後ようやく嘆願書・請願書が提出出来た。相馬双葉漁業組合鹿島地区代表の松野さんはじめ、漁業関係者の粘り強い交渉により復旧工事の決定を得た。平成 25 年 3 月工事着手。平成 28 年 3 月 21 日「真野川漁港開所式」が行われた。漁業再開。南相馬市唯一の漁港は、地元関係者の強い思いで復旧した。

真野川漁港には現在 19 隻の漁船が所属し係留しているが、震災前の半数だ。しかし、新造船の性能が良いため目的量の漁獲高は確保しているが、操業再開し 2 年経っても未だに試験操業状態である。水揚げされる魚介類の出荷基準値は、国 100 ベクレル、県漁連は 20 ベクレル以下と定めている。漁業組合は風評被害払拭だけでなく、豊かな漁場資源の活用を願っている。避難と高齢化で仲買人がいないため、水揚げ魚類は磯部漁港(相馬市)まで運んでいる。相双地方の漁港は、震災から相互互助で来た。

9 月 16 日「第 3 回かしまみなとまつり」が行われた。漁業関係者総意のまつりで、大変な賑わいだった。

真野川漁港には未来がある。若手後継者がこの真野川漁港を担っている。何よりの誇りである。

4. 地元でお客様に添う経営を確立

～育つ若手職人たち～

◆ 佐山トク子さん 工務店社長

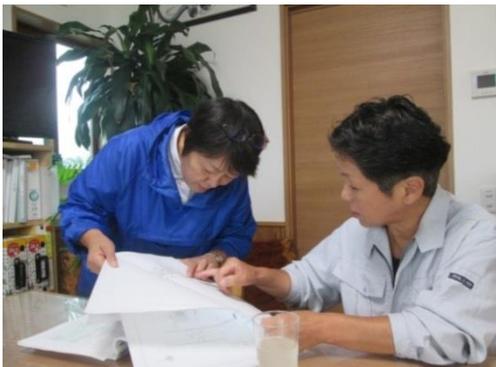


佐山トク子さん(59才)

小高区で工務店を運営していた夫は平成9年他界。友人から「資格のないものは止めるべきだ」と言われたが、建築士の資格を取得し、会社を存続させた。

原発事故から7年6か月、無我夢中で仕事をして来た。依頼は地元のお客さんが多い。

「小高区は、2,800人戻ったというが、戻ったのは年寄りばかり。若い家族は戻らない。解体された屋敷跡に「俺ら夫婦だけだから小さく作ってくれ」との注文が多くなった。



女性建築士と打ち合わせ



長男飛鳥さん(37才)



次男央記さん(28才)



女性職人



飛鳥さん若手に指導



屋敷跡に小さな家

- ◆平成23年3月12日、家族・職人たちそれぞれに避難3月20日一人原町区に戻りボランティアに参加。
- ◆小高地区は「帰還避難区域」のため、7月、鹿島区に仮事務所・仮工場を建設。2人の職人と仮設住宅、津波半壊リフォームを請け負う。他社は職人が戻らないため、仕事が出来なかった。
- ◆平成26年3月、原町に支店を設置。3人の息子、職人たちが戻って来た。「帰還困難区域」の小高区本社から機械類を持ち出すため、申請手続きが必要だった。仕事がようやく稼働に乗った。
- ◆地元のお客さんからの受注が増えた。震災前からのつながりが生かされた。
- ◆南相馬市は女性建築士5人。女性同士が連携し、仕事の協力をし合う仲間である。
- ◆女性経営者として「お客様の立場が第一」を信念にしている。11人の職人たちに対しても、それぞれの立場を尊重し、現場を任せるほどの良い信頼関係にある。
- ◆20代(女性2人)から40代若手職人は50代の親方から技術を磨く。3人の息子、職人たちが育っていく。
- ◆長男飛鳥さん「おふくろを尊敬している。受注が下がっていく現実で、若い世代のおれらは引き継ぐだけでなく、時代に合ったやり方を模索している・・・おふくろとバトルしながら・・・」。